

銀河系

歌集 銀河系

相原健一

歌觀照叢書第86編
短歌新聞社

相原健一略歴

明治42年5月15日 埼玉県に出生
昭和4年3月 埼玉県師範学校卒
昭和4年4月 小学校教師
昭和9年3月 「歌と観照」入社岡山巖主宰に
師事、現在同人
昭和45年3月 小学校校長停年退職、後山村女子
高等学校講師、現在にいたる
現住所 〒350 埼玉県川越市大字大袋88
TEL 0492-43-0303

歌集 銀河系 歌と観照叢書86篇

昭和52年1月15日発行

著 者 相 原 健 一

発 行 者 石 黒 清 介

印 刷 所 日 本 文 芸 印 刷

製 本 所 菊 川 製 本

発 行 所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9
電 話 (03) 312-9185
振替口座 東京 5-21683 番

定 価 2000 円

歌集「銀河系」を読んで

相原健一氏は昭和九年以来、歌と観照誌を通じての古い歌友の一人である。氏は温順な静かな性格の人だけに、闘志を燃やし、議論を戦わすようなことは少なかったが、親しみのある味わいの深い人で、教育者になりがちな生まじめな、気取った冷たさがなく、皆に好かれ、尊敬されていたようであった。氏の作風は一見平凡のようにも受けとれないこともなかったようであるが、他人に動じることもなく、又他人に安易に迎合することもなく自分の意志に従って着実に歌境を展き、誠実に歌の道を築き上げて来たのである。それは氏の家庭が農業を副業としながら、学校教育の指導を本職として科学教育に専念していた関係上、又氏の持つて生れた温容の性格がしからしめたのであろう。氏の歌には常に激烈

な感情的な面は少く、むしろ奥深い温和な血が底流として流れており、ほのぼのとした感じをあたえる歌が多かった。

相原君が此度、歌集を出版することになり、序文を依頼されたので、氏の歌を改めて読んでみて驚いた。それは天体を歌っている歌が非常に多いことと、同時に氏の佳作は天体の一聯の中に集中していることであつた。かねてより天体の歌が多く、而かも秀れていたとは思っていたが、これ程までに明確に氏の歌を性格づけているとは思っていなかったのである。

歌集の題名が「銀河系」となっているところを見ても、氏がいかに天体に歌を求め、天体に精魂を打ち込んで来たかが解る。氏が科学教育にたずさわって来た関係上、天体に関心を特にとって来たのであるが、それ以前に両親が農業を主体として生活していた関係上、農業と天体の関係が知識として結びついていたばかりでなく、農業と季節の移りかわり、

一日の時間の移りかわりが、生活と深い関係があったのである。星の位置が朝の時刻を告げ、月の動きが季節を知らせ、星と庭を取りまく樹木との距離が寝につく時刻を知らせ、生活と農耕と日時とが一体となつて生活を支えて来たようである。従つて作者の天体に興味を持ち始めたのは知覚欲求と言うより、氏の幼き時代の生活環境から身についていたのである。而も氏は環境的欲求を知知的、科学的、教育的観点に引上げた処に、氏の歌と天体との結びつきが生れ、育つて、歌となつて現われて来たのである。歌集を読むと解るように星や、月や、星座が科学的のみに取り上げられることに終つてはいない。

天体の歌がこの歌集の大きな特色であつて、天体をかくまでに広く、深く歌つて来た歌人は例のないことである。而も天体を天体として単に描いて来たのみでなく、天体は氏の生活と密着し、作者の血が一首、一首ににじみ出ており、もろもろの天体を把えながら、科学を超え、氏の

人間性を織りこみながら、主体的に表現しているのである。作者が全国各県から提出された数多くの論文の中から美事に当選され、読売教育賞を授与され、又教育功労賞をも受賞されたのを見ても、いかに天体に情熱を燃やして来たかが知られる。

アンタレス先駆となして上り来る火星はさらにもゆる血の色

月かげに火星射手座を引き具して森の梢に逃げゆくところ

天の川富士にかかれば稲を刈る季と告げたりし母杓なり

濡れしままのネガをすかせば銀粒子さだかに彗星の尾をとらへ居し

台風の気圧配置に拭はれて近近と明るきムルコス彗星

再びは求むる期なき彗星をレンズの視野に夜毎追ひゆく

近日点を過ぎし彗星牛飼の足元に来て光度をおとす

進みゆく月蝕を追ふ鏡筒がきらめく程に露を結びぬ

ふとさめし夜行列車の窓一つ籍なき星をともしひて行く

木枯に砥ぎすまされし夜の空カニ星雲の痕跡の光

カストール追ひすがり来しボルクス対のならびに光やすらふ

睦まじく相またたきて東の空に双子はのぼりたかまる

らんらんと明の明星懸りたる櫛くぐりて初詣しぬ

球体をとりまくリング傾きてさらにめぐらす衛星の族

夕焼の色よりあかく金星と木星睦み落ち行くとこ

凜凜と星座を張れる寒の空吾のめぐりに降り来るとし

スクリーンに燃ゆる太陽欠けてゆくたしか過ぎたる宇宙のおきて

夏の日をドームにこもり研修生と太陽像の黒点を追ふ

プレアデスのくらきはめきを仰げばしんしんとして吾の耳なり

シリウスのきらめきかへす鋭どさに大気あまねく氷らむとする

以上のような天体の歌が集中に百首をこえており、いずれも秀れた歌であり、星の歌集と言っても過言ではあるまい。作者は心から星を愛し、天体に心を寄せ、宇宙にひろがるもろもろの現象に心を引かれながら歌に表現して来たのである。見たままの星ではなく、作者の心と、天体とが主客融合した境地になって歌を作っている。客観にとらわれず、科学に偏せず、さりとて主観に溺れることなく、理性と感情とを止揚しながら、一首、一首を時に応じ、ものを極めながら融合の世界で歌を創っている。従って無理なく、不自然さがなく、愛と星が一体となってロマン的香りを漂わしている。具象と心象に根を張って生れて来たのである。その意味でこの歌集は広くその真価を世に問うのにふさわしい歌集である。一読するに値する歌集である。

天体の歌のほかに山の歌、児童の歌等、相原氏らしい人柄が主色となつて描かれている歌がある。そして作者の人間性が体温となつてじかに

伝わって来る。

蚊帳かげに散葉あはぐ妻のかげそぎおとされし如くに瘠せる
下りゆきし地階の強電実験室冷え冷えと唸るモーターの列

省みて摸索と思ふ吾が仕事面映ゆく受賞の席につらなる

白雲と見まがふまでの雪溪がガスのはれ間にたちはだかれる

日本海よりただに巻きくる湿り風さへぎりてここに樹氷のすがた
復円の月の光のあまねきにひさしにむすぶ霜のま白き

受験票と削り揃へし鉛筆と机上に並べ開始待つ生徒

兼農を支へて老に近づける妻なり始めての旅を共にす

学園のテラス行き交ふブラウスの白輝きて梅雨明けにけり

昨日より今日は身の内軽ければ顔洗ふ水思ふまま使ふ

この歌集に作者は天体へのロマン、そして現実界への人情を、氏の人間性的オブジェクトで包みながら歌を作っている。作者の永年にわたる地味な努力と精進が実を結んだのであろう。これを天機として、天体に、現実に向って、更に深い、新しい光を探り、道を究め、佳い歌を創られることを願ってやまない。

昭和五十一年九月

三 鬼 実

目次

歌集「銀河系」を読んで 三鬼実

六分儀

昭和三〇—五〇年

火星をりをり

元

アランド彗星

三

邂逅

三

人工天体

六

アポロ11号

三

なほもえて

三

日蝕と子供

五

地球照

新星

条痕

昭和二四—二九年

閉鎖花

秩父自然科学博物館

湯川博士ノーベル賞に

妻病む

春蟬

甲府に研究会ありて

表情

昭和三〇—三二年

罌罌

罌

罌

罌

罌

罌

罌

罌

油壺	六
読売教育賞受賞	七
子供と花	八
干潮線	九
笠山行	一〇
ロゼット葉	一一
白馬岳	一二
昭和三十三—三九年	一三
転任の季	一四
マジックハンド	一五
結論	一六
風はみどりに	一七
工場団地	一八

佐渡拾遺	一三
水栽培	二五
昭和四〇―四六年	
能 登	二九
沼くらく	二三
なげきはながく	二七
北海道	三〇
改 築	三三
日時計	三五
国友藤兵衛	三六
受験の季	四一
九州に	四三
秩父屋台囃子	四七

昭和四七―四九年

東北の旅

一五〇

うつろひ

一五三

平井氏を悼む

一五五

城下町川越

一五八

平林寺

一六二

登熟期

一六五

球根

一六九

痕跡器官

一七三

櫛の四季

一七六

立山

一八三

昭和五〇―五一年

留鳥

一八六

あ と が き	奥 武 蔵	現 身 の 声	三 峯 山	梅 雨	芽 吹 の 頃
------------------	-------------	------------------	-------------	--------	------------------

二 七	二 四	一 七	一 四	一 三	一 六
--------	--------	--------	--------	--------	--------